ふみの会ニュース

■発　行　ふみの会広報部
■発行日　2007 年 11 月 5 日
■連絡先　藤川博樹
〒 115-0045 北区赤羽 1-48-3-203
有限会社マイクロデザイン内
tel03-5249-5797 fax03-3901-6090
■編 集　中井、塚原、藤川、蒲原雅、佐藤、蒲原直
http://www.mdn.ne.jp/~fumi/top.html

No.309

11 月行事日程

■ニュース編集
原稿はテキストにして下記へ
ワード・一太郎文書も可
kamo@sun.email.ne.jp
エッセイ：5 枚（2000 字）
小説：10 枚（4000 字）目安
■締め切り
2007 年 11 月 20 日（火）
■購読料・年会費
1200 円（年）
郵便振替：
00170-1-18290 ふみの会

使っている器のうち右下以外の 4 つが友人の大野史郎・作のもの

♪ 天然きのこを料理する ♪

■（1）ウスヒラタケのタマネギ、ベーコン炒め（左下）ウスヒラタケは栽培品もあるがもちろん天然ものの味は抜群。かきたまごは別に作っておいて後で混ぜ込む。塩とコショーだけのシンプルな味つけ。■（2）クリフウセンタケの傘の銀あんかけ（右上）このキノコのおいしさ、万能の応用範囲を知れば、どんなひとでも天然キノコに対する偏見が吹っ飛ぶと思う。傘だけを茹でて、塩で薄く味をつけ、片栗粉を融けばよい。この味の上品さよ！■（3）カバイロツルタケのゴマ味噌がらめ（上中央）カバイロツルタケはだしのでるキノコで、吸い物によいが、今回は変化球である。少し甘めの味噌と酢を使う。茹で汁と混ぜればおつな一品となる。■（4）マスタケのフライ■（5）クリフウセンタケの柄の天ぷら（右下）マスタケの肉は本物の鱒にそっくり。食感も姿も似ている。味は濃いので知らないひとは魚肉といわれても疑わないだろう。クリフウセンタケの柄は、繊維の歯切れのよさと味のよさが相乗効果を生む。油に合い、ビールにはよい友となる。■（6）ウラベニイロガワリのトマト煮（左上）おおきく切って煮込む。濃厚な味だが食感は単調。そこで先に採集して冷凍保存していたイロガワリも入れる。イロガワリの傘はぬめりがあり、味に変化がでる。■だいたい1時間くらいで料理は完成。5人家族の我が家だが、それぞれにごはんをおかわりしつつ、みんなきれいに食べてしまう。3姉妹のうち、上ふたりが中学生、下のはまだ小学校4年生だが、よく食べる、食べる。この夜はスープなしで、子どもたちは「さんぴん茶（ジャスミンティー）」を、大人は久々にビールだった。（M）

「ふみの会ニュース」No. 308 を受領しました。
毎回送って頂きお礼を申し上げず失礼いたしています。
少ないですが、切手を送らせていただきます。
二〇〇七年十月十日　森与志男

小説　パンドラの箱

藤川博樹

■第五章　山の仲間の青年が遭難したこと

常三の年上の友人である田尾さんは千葉に住んでいて、同人の仲間が誘われて遊びに行った。みなで夏の房総の明るい日差しを満喫した。そこには田尾さんの知人友人や、奥さんの友達が集まっていた。

田尾さんは小さな土建屋で働いていて、ショベルカーなどの重機を使って公園の造成などをやっていた。自治体からゼネコンにおりてきた五億円の仕事を、中堅の土建屋が一億円で受け、田尾さんの弱小土建屋が数千万円で請け負うという構造になっているのだそうだ。営業の仕事は、担当者を接待して酒を飲ませ、仕事をもらうこと。

そこには九州から作家を目指して出てきていた阿倍さんやその友人なども誘われて来ていた。

奥さんの高校時代からの親友の早川さんという女性が一人で来ていた。大手自動車メーカーに勤める旦那さんは仕事も組合活動も忙しい。結婚七年目だが、子どももいないので、早川さんはあちこち一人でかけることが多いようだった。

昼間海岸で泳いだ後、夜はみんなで食事をしビールを飲んだ。田尾氏は三〇センチＬＰレコードの上に針を落とした。それは夏の暑い夕べのひとときにさわやかな風を流し込んだ。田尾氏の家の簡易エアコンであるウインドファンの音と混じって、ハイフェッツの演奏するチゴイネルワイゼンのメロディーが流れた。それははっとする美しい音色だった。

その日は、雑談したり皆でトランプをやったり麻雀をやったりして楽しく過ごした。

翌日、田尾さんの家を辞して皆で電車で帰った。東京方面の電車を乗換駅で待っているときに、常三は早川さんの職場の話など聞いていた。データ入力の仕事が忙しくてタイプを打ちすぎた早川さんは頚肩腕（けいけんわん）症候群になり、今は課長の秘書のような仕事をしている。旦那さんは同じ会社の整備士で職場結婚だった。

早川さんは自動販売機から缶コーヒーを買ってきて飲んでいたが、三分の一ほど飲んだところで常三にくれた。早川さんは常三が缶に口をつけ空を見上げてコーヒーを飲むのを見ていた。

次に早川さんと会ったのは上野で、常三は文化会館で都民レコードコンサートが開かれていたのを知っていたが、誘われて文化会館に行った。夕方の暗がりの中から早川さんが出てきて「残念でした」と言った。その日はたまたま休みだったのだ。コンサートを聞く変わりに二人で夜の上野公園をいつまでも歩き、話すことはいつまでもつきなかった。

次に常三は、早川さんの参加している職場の登山の会への同行を誘われた。本当に登山が好きな連中で、夜の新宿駅に集合して長野行き普通列車に乗り込むのだ。南アルプス方面行き夜行列車は登山客でいっぱいだった。松本まで数時間かかる超鈍速列車だが、八ヶ岳や南アルプス、白馬を目指すには最適なダイヤなのだ。

ごとんごとん揺れる列車の中で、四人がけの座席に座ったまま眠ろうとするが、夜行登山が初めての常三も、以前から登山会に参加していて慣れているはずの早川さんもあまり眠れなかった。

明け方茅野駅で下車。いかにもリーダー然としたがっしりした体格の中城さんは疲れ知らずで、ぐいぐい皆を引っ張っていく。今回の北八ヶ岳はどちらかというと初心者コースで、中城さんを始め、登山会の山中氏や町田君などのベテランにとっては、会として初心者に呼びかけ、会員を増やすための登山なのだ。山中氏は奥さんも参加していたが、中城さんも町田君も独身だった。中城さ

んは沖縄出身だったが、山のためだけに生きているような髭の濃い山男で、会社の仕事ではひたすら週末の登山だけを待って時間を耐え、週末に生き返る。金曜夜二十三時五十四分に新宿を発車する夜行列車の常連だ。登山から帰るとまた次の週末を目指して机にかじりつく。

今回の会の性格上、初心者の若い女性などが多く、稜線のゆるやかなキタヤツとはいえリーダーたちもあまり飛ばすことはできなかった。ゆっくりしたペースにもかかわらず、一部の女性たちが遅れだした。早川さんも列車の中で眠れなかったこともあり、また労働災害認定の頚腕症の影響もあって、かなりバテてきていた。すると、リーダーの中城さんが、早川さんのリュックを受け取ると、ひょいと自分の巨大なリュックの上に担ぎ上げた。小柄な早川さんの背中では普通のリュックに見えたものが、中城さんの巨大なリュックに結びつけられると、大木にぶら下がった松ぼっくりのようにしかみえなかった。中城さんは、今まで登山をしていて「つぶれた」ことが無い。自分がどこまでやれるか試してみたいという気持ちもあるのだという。その気持ちが彼をより高い山へ、より急峻なコースへと駆り立てる。いずれヒマラヤにも挑戦してみたいという。

山中さんは歩きながら奥さんの聞こえるところで結婚観を語っていて、「結婚していながら、他の女性を好きになることもある」という。まだ結婚したばかりの若い奥さんは知らん顔して歩いている。キャンプ地に到着すると、山中氏や町田君たち男が中心になって二つの大きなテントを張り、女たちは食事を用意した。

食事が終わって常三は早川さんと一緒に水場に就寝の準備に行った。あたりの草地や木々に夜露が降りはじめ、空は抜けるように高く、無数の星々が銀の粉を撒いたように輝いていた。都会に住む常三にとってこの夜空のためだけに山に登る価値があるのだと感じられた。早川さんと二人並んで、常三は万感の思いで山間の森と星と夜の空気を堪能した。

翌朝、歩きはじめると山中氏の奥さんの調子が悪いという。寝袋が無かったのでテントの中で横になっていて眠れなかったのだ。早川さんが旦那さんに言わなくていいのかと聞くと、「いいの」とリュックに寄りかかった姿勢で一晩過ごした。昼の休憩のとき、早川さんは「わたしだったら一戦あるわよ」と息巻いていた。シュラフはリュックの底にしっかり詰まっていた。旦那さんがもっぱらリュックを作り、一番底に詰めてあったのに気づかなかったのだ。後で、「自分のリュックの中身も知らないとは」と旦那さんに怒られていた。山中夫人にしては、旦那さんが裏切ったわけではなかったので、一応気持ちは収まったのだ。常三が山中夫人と四方山の話をしながら登山道を歩いていると、楽しそうに話す奥さんを山中氏は心配そうに見ていた。山中氏は自分は結婚していて他の女の人を好きになるのは十分あり得ることだとしながら、奥さんが他の人を好きになる可能性については考えてみなかったらしい。

町田君はまだ二十台半ばの若さで、中城さんや山中氏と三人で、より険しい南八ヶ岳はもちろん、穂高や槍ヶ岳にも頻繁にでかけていた。大柄で色白でおっとりとした性格で、女性も含んだ今回の登山グループの雰囲気を和やかにしていた。

登山ルートにある崖の途中で休憩をとった。急峻な崖に突き出した三十センチ四方の岩場に町田君は登り、写真機に向かってポーズをとった。早川さんが顔色を変えて「やめなよ」と小さな声で叫んだが、町田君はにこにこして帽子を取って手で髪をとかしたりしている。足を踏み外せば命はないだろうが、町田君は何事も無かったように岩場を降り、残りのルートを歩き始めた。

山を無事に下山して数日後、常三はまた早川さんに会いたくなり、早川さんが読みたいといっていた中里喜昭の小説『解かれゆく日々』とポリーニの演奏するレコード、ショパン『エチュード全曲』を持って早川さんのマンションまでかけた。旦那さんは夜勤が多くその日も家にい

なかった。プレーヤーに掛けたレコードが裏面だったのに常三が気づいて裏がえそうとした。常三は律儀にもA面から順番に聞かないといけないような気がしたからだが、早川さんは「待って」と言って、息を詰めて音楽を聴いている。裏面最初の十三番のエチュードの絹のような極上の旋律が早川さんを凍りつかせてしまったのだ。静止した水のような透明感のある演奏だった。

美しいショパンの旋律に二人は感動して聞き入った。常三がソファにならんで座る早川さんの手を取って抱き寄せようとすると、早川さんは「だめよ、彼のこと愛しているもの。裏切れないわ」と言った。

翌週の休日も常三は早川さんに会いたくなって、家へ電話をかけた。夜勤でいないはずの早川さんの旦那さんがでたので常三は驚いた。沈黙していると、向こうから電話を切ってしまった。早川さんの旦那さんはいつも交代の夜勤勤務で遅くなり、夜勤のない日も組合活動が忙しくて家にいないのだ。それで早川さんは独身のように友達と海に行ったり、一人で登山会に参加して山に登ったりしているのだ。

常三は翌日、早川さんの通う私鉄の乗換駅で待っていた。はたして、夕方、早川さんが歩いてきた。彼女の顔色は悪く、うつむき加減に歩いてくる。常三を見ると驚いたように立ち止まり、今事情で「たて込んで」いるから、また電話すると言って私鉄の改札口へ去って行った。

翌週、常三は上野の喫茶店に呼び出され、早川さんと会った。早川さんは先日の落ち込んだ様子とは打って変わって生き生きとした表情だった。コーヒーに口をつけると、明るく「わたし、町田君のことを好きだってこと発見しちゃったのよ」と報告した。早川さんは自分にとってのうれしい出来事は相手にとってもいいことに違いないというしあわせ感覚にあふれていた。うれしすぎて、他人のことは見えなくなっている。

早川さんは町田君から呼び出されるようなことは、かつてなかったことだったので驚いた。歌声喫茶に行くと、職場の活動家としても人間としても早川さんのことを尊敬し好きだったと告白された。早川さんは既婚者なので、独身の町田君としてはあきらめるしかなかった。それが先月の八ヶ岳の山登りに、早川さんが町田君と同年の若い常三を連れてきたので、町田君のくすぶっていて永遠に燃え上がることがないはずだった愛のおき火が、焔となって舞い上がったのである。早川さんも町田君のことを憎からず思っている自分を発見した。相思相愛である二人の男女がそのことを互いに確認した瞬間ほどの幸福はこの世にないはずである。

しかし、この後次々と予測できないような不幸が早川さんを襲った。愛を確認し会った二人は、早川さんのマンションへ行き、町田君が持ってきたワルターの指揮するマーラーの『復活』のレコードを聞いていた。そこへ、夜勤のはずの早川さんの旦那さんが、予定変更で帰って来た。町田君は早川さんへの愛を宣言し、早川さんを信じていた旦那さんは驚いて我を忘れて動揺した。あまり動揺が激しいので、町田君には帰ってもらい、早川さんはその夜、旦那さんを慰め続けた。町田君を好きな自分をはっきり理解した早川さんはそのことを旦那さんに告げ、町田君との生活を選びたいといった。旦那さんは絶望してマンションの六階から飛び下りようとした。二人は食事もしないで話し合いを続けた。その時、電話がかかってきて旦那さんがでたが、間違い電話だったのか相手が無言だったので切って、居間に戻った。その後、一晩中、旦那さんは発作のようにベランダから飛び下りようとするので、早川さんは旦那さんのからだを押さえつけ、一睡もせずに彼を見ていなければならなかった。

以上が、「たて込んでいた」という早川さんの語った顛末である。早川さんは、町田さんを好きな自分を発見した以上、これから町田君と暮らすと言った。常三が「ひどい。もうあなたに会うことはできない」と言うと、早川さんは涙ぐんで、分かったわ、もう友達としても会うことはできないのねと言った。しかし、町田君への新たな愛を発見した早川さんとしては、涙ぐんだとしても常三を失うことには何程の痛みも覚えなかったのだ。

早川さんは、持ってきた『解かれゆく日々』と『エチュード』のレコードを常三に返した。『解かれゆく日々』は旦那さんがいたく感激して読んだ。組合活動に生活の大部分をかけている早川さんの旦那さんには、中里喜昭の小説は身につまされると

ころがあって面白かったのだ。ポリーニのピアノは、その後自分でレコードに針を落としてみたが、最初に聞いたときの感動はもうよみがえらなかった。早川さんの心はショパンからマーラーの方へ行ってしまったのか、ポリーニの演奏に何も感じなくなってしまったのか。

旦那さんは、町田君との一件以来、それまで組合にのめり込んでいた生活を変えて、家にもできるだけ帰って来るようにすると言った。夜勤の回数も減らしてもらった。旦那さんは組合活動に熱心に取り組んでいた時、はつらつと充実していて生きがいを感じ、自分の生活に不満はなく幸福だった。自分が幸福であるということは彼女も幸福だと錯覚していたのだ。早川さんは旦那さんの組合活動に理解を示していたつもりだったが、二人の心は通じていなかった。そのことを旦那さんは気がついていなかった。

三カ月が過ぎた。常三はもう早川さんには会おうとしなかったし、早川さんからの連絡も無かった。そして、ある日突然早川さんから電話がかかってきた。『サンダカン八番娼館』の舞台のチケットが手に入ったから見に行こうという。劇場で舞台を見ていて、第一幕の幕間に早川さんが「あなた、何も知らないの？」と聞いた。常三が目を見開いて振り返ると、町田君が山の事故で死んだということだった。あまりの突然の内容に驚いていると、早川さんは町田君と一緒に暮らしていたアパートで、偶然ラジオのニュースを聞いていて遭難のニュースを知ったという。

町田君は、常三も知っている中城さんや山中さんと一緒に三人で岩山へ登っていた。三人はより難しい山へそなえての修練を日頃から欠かさず、その日も訓練をかねてその岩場を登っていた。そこはたくさんの登山する人たちが練習に訪れていて、上を登っていた若い男が落石を発生させた。三人は岩の斜面で休憩をとって座り、谷を眺めていた。岩は町田君の頭を直撃し、中城さんの片足を砕いた。

ラジオのニュースを聞いていた早川さんは、その瞬間頭が真っ白になって何もわからなくなったという。

劇が終わって夕食を食べながら、常三は早川さんからその後の長い話を聞いた。

町田君を好きな自分を発見してからの早川さんの決断は早かった。旦那さんを無理やり収めてから、自分のマンションを出てアパートで町田君と暮らし始めた。家を出た後、旦那さんは彼女のアパートを探し当ててやってきて、町田君を含めて三人で話し合った。町田君は、自分と彼女の心は変わらないので、二人は一緒に暮らしたいのだといった。旦那さんはアパートに泊まっていくようにいわれたが、一人アパートを去って行った。

町田君が山へ行った前の日、二人で居酒屋で酒を飲んでいて、早川さんは自分が妊娠したかもしれないと思っていたので、そのことを町田君に伝えた。町田君が冗談に「山で遭難したらどうする。その子どもを育てて行ってくれる？」といった。早川さんは、「あなたの思い出を胸に、一人であなたの子どもを育てていくわ」と答えた。それは今思えば彼の冗談ではなく、彼は永遠の別離の予感のようなものを感じていたのかもしれない。

町田君の葬式を彼の群馬の実家で済ませた後、早川さんのことを心配して旦那さんがアパートまで見に来て、家に帰ってくるようにいわれた。早川さんは迷っているようだった。常三は、早川さんの自分から離れていた三カ月間の出来事を聞いて、早川さんは自分の生き方をはっきり選び、覚悟して人をそれなりに傷つけることもしたのだから、その道を貫くべきだと思った。お腹の中にいるかもしれない町田君の子どもを育てて一人で生きるべきだ。常三がいささか熱くなって話すと、早川さんは「そうするわ」といった。

早川さんの長い物語を聞いた後、二人は上野で別れた。

その後、常三は早川さんとは一度もあわなかった。翌年、二人の共通の友人である千葉の田尾さんから、早川さんが旦那さんの家に戻り、子どもを出産したことを聞いた。

オーケストラ

中井　豊

オーケストラの演奏を初めて聴いたのは高校三年生の秋だった。その頃、私は和歌山県古座町（現在は串本町となった）に住んでいた。瀧本文彦君と一緒に列車で新宮市まで行って、市民会館のホールで聴いた。どのようにして演奏会があることを知ったのかは定かでない。多分、音楽事情に詳しい瀧本君から聞いたのだろう。

和歌山県南端の田舎町にオーケストラがやってくるなどということは五年、いや十年に一度くらいのものではなかろうか。とにかく都会から遠く、今でも特急で大阪から三時間半、名古屋から四時間半くらいかかるから、当時はその一・五倍は時間のかかる土地だった筈だ。しかも、人口が少ないから、チケットを売りさばくのは大変である。四〇年も経った最近は人口が新宮市で三万五千程、串本町で二万弱に減っているから、クラシック音楽の演奏会など経営的に成り立つまい。自治体の助成があれば別だが、どこも財政は四苦八苦に違いない。

演奏会は夜だった。会場に入ると、舞台には譜面台と椅子が並べられ、後列は二、三段になっている。左側の奥にティンパニーが照明を浴びていて金色に輝き、印象に残る。大太鼓などもあった筈だ。その背後にＴＶで見るような反響板があったかどうか。そういったことは兎も角、照明の効果に私は落ち着かない気持にさせられた。期待と、それが外れた場合の心の準備が私の中に生まれ、緊張した。

曲目はベートーヴェンの「交響曲第五番《運命》」とドヴォルザークの「交響曲第九番《新世界より》」で、演奏は朝比奈隆指揮の大阪フィルハーモニー交響楽団だった。朝比奈氏は一九〇八年生まれだから、五八歳くらいの気鋭の指揮者であったろう。後に文化勲章をもらい、二〇〇一年に亡くなった人だ。

演奏には特に感動した憶えがない。ラジオやレコードでスピカーを通した音に慣れていたため、生（なま）の楽音が柔らかすぎて心身を素通りしてしまったらしい。見ていて、楽器を演奏する団員が聴衆にも曲にも演奏成果にも殆ど関心を抱いていない風だった。アンコール演奏もなく終わったためか、ビジネスライクにさえ感じられ、これがプロというものだとも思った。慣れない者の負け惜しみのような気持ちが働いたのかも知れない。何より、演奏会に足を運ぶということが、あまりにも取って付けたような出来事だったので、違和感のようなものが心に残った。それで、街灯の明かりの下を駅まで歩いた帰途も瀧本君に多くを語らなかった。

ＮＨＫラジオに「朝の名曲」「名曲の泉」という番組があり、解説に続けて、知っている曲、知らない曲を毎日のように放送していた。これを聴いて、気に入った曲の名を覚えたりした。その方が、実のところ、よほど親しく楽しかった。最近、演奏会にトークが入ることがある。演奏する人は集中力が削（そ）がれて大変だろうが、聴衆との交流は今後ますます大切になるだろう。クラシック音楽の普及・民主化である。

受験のため自宅での浪人生活に入ったばかりの春、大阪市内で新人ピ

アニスト（「なには芸術祭」新人賞受賞者？）の演奏会があり、抽選で招待するという案内を新聞で見つけ、葉書で応募した。モーツァルトの「ピアノ協奏曲ニ短調」が曲目にあることが魅力だった。他にも序曲か何かがあったかも知れない。オーケストラは矢張り大阪フィルハーモニー交響楽団だった。数日後、招待の官製葉書が届いた。今になって考えると、抽選するほど応募があったかどうか。

会場は大阪梅田の「サンケイ・ホール」だった。この時は和歌山県川辺町という日高川に面した土地に住んでいたため、片道二時間以上かけて出かけた筈だ。これが都会の音楽ホールに入場した初めての体験だ。

この演奏会では、何かの新人賞をもらった女性ピアニストがソロを弾いた。速いパーッセージで止まってしまい、そこから弾き直すという一幕があった。これには「がんばれ！」と応援したくなるような人間らしさを覚え、私には好ましかった。

二年間の浪人を経て大学に入ると、「大学紛争」の最中で、数学科の講義は外部に部屋を借りて行われることになった。大学にはオーケストラがあり、むしろこちらで数学科の近藤泰寛君と親しくなった。そして、一度、練習に参加してみた。瀧本君にもらったヴァイオリンで「ラデツキー行進曲」の第二ヴァイオリンを弾いた。ロクに弾けないくせに、すこぶる楽しかった。合奏に加わることの感動（？）――一種の自己陶酔を味わったのであろう。しかし、クラブ活動は苦手なので部員にはならなかった。ただ、翌年か翌々年に曲目に選ばれたベートーヴェンの「交響曲第五番《運命》」だけは、最初に記したような思い出のある曲であり、高校生オーケストラでさえ演奏したと聞かされたことがあるので、練習にも本番にも参加させてもらった。

その後、フェスティバル・ホールでの東ドイツのゲヴァントハウス交響楽団の演奏会に行ったりもした。指揮者はマズーアという人だったと記憶する。入場料金は八千円もしたが、このオーケストラは素晴らしかった。曲目はベートーヴェンの「交響曲第八番」等だった。音楽がしっとりと息づき、美しかった。残念ながら、大阪フィルハーモニーは見劣りした。技術の差というより、精神の差――やはりクラシック音楽は彼ら西欧人の文化なのだろう。それでも、聴くことは演奏に参加するのとは異質の体験だった。目の前に本物の御馳走を並べられながら、口に出来なかったような感じがあった。

大学オーケストラには、医学部の内田博重先生もヴァイオリンを携えて練習に来られることがあった。その縁で、二〇〇三年六月に内田先生が指揮されている大阪府医師会交響楽団に入団した。以来、ベートーヴェンの「交響曲第四番」「交響曲第七番」「ピアノ協奏曲第三番」を始め、ブラームス、チャイコフスキーの交響曲、ショパンやリストやグリーグのピアノ協奏曲などの演奏に、第一ヴァイオリンで参加してきた。お陰で、生（なま）の音に親しみ、やっと音楽を聴く耳が出来てきたように思う。相変わらず、あやしい腕前であるが、オーケストラ音楽の感動は練習と演奏会の両方に演奏者として参加することによってこそ味わえる気がしている。

沖縄の思い出④

多村　喜木子

ドラマや旅番組の影響からか今ほど八重山諸島も西表島も有名ではなかったため、宿には個性的なお客さんが多かった。

特に印象に残っているのは、二週間ほど滞在していただろうか……。腕の肘から手首の間に紐付きひょうたんの刺青をしたおじさんがいた。年は七十歳ぐらい、背が高く痩せていてよく焼けた肌に恐ろしく鋭い目をしていた。昼間はたまに釣りに出かけていたようだが、ほとんどの時間を部屋で読書をして過ごし、毎夕食後にカウンターで八重泉という泡盛をおいしそうに飲んでいた。最初は愛想もなくこわい存在だったが、カウンター越しにその透明のビンに入った泡盛を注いだり、何度か挨拶を交わすうち、少しずつ笑顔を見せてくれるようになり、いつの間にか気軽に話が出来るようになっていた。

そしてある昼下がりのゆるりとした時間、部屋で話をしないかと言われた。今の私ならためらったかもしれないが、その頃は何もわからず、ただどこか寂しげなおじさんが少しでも心を開いてくれたことが嬉しくてウキウキと靴を脱いで上がりこんだ。そして畳の上で向かい合わせに座り、おじさんの話に耳を傾けた。内容はほとんど覚えていないが、昔の仕事の話だったような気がする。かなり長い時間部屋にいただろうか、突然おじさんは鞄の中から小さな巾着袋を大事そうに取り出し、逆さにしてバラバラと畳の上に中身を出した。それは緑やら紫やら白やら美しい色の小さな石で、宝石だと説明をしながら小指の爪ほどの大きさで白くてツヤツヤした石を私に渡し、ネックレスに丁度良いと言ってくれた。なぜそんな高価なものを突然私にくれたのかわからなかったが、こわいと思いながらも目の奥に温かさを感じて親しく思っていた気持ちが通じたようで嬉しかった。

ある時は政治家の秘書という三十五歳ぐらいの男性一人客がいた。確か一泊ほどの南風荘にしては短い滞在で、夕食後に男が星を見たいと言い出した。お父さんとお母さんがどこか最適な場所を考えている間、少し前に犬の散歩中、星を見るのに良さそうな場所があったことを思い出した。そこは昼間でも薄暗い雑木林を通り抜けなければならない桟橋で、ましてや夜など暗くてこわくて絶対に一人で行けないような場所だった。だからチャンスとばかりに男の案内役を申し出た。

想像通り雑木林は真っ暗で、お互いがどこにいるのかわからないため、はぐれないように服の端を掴みながら前に進んだ。桟橋に着くと小さな街灯があり、それでも左右に広がる海に落ちないように一歩一歩注意して先端まで進んだ。男がどれほどの星空を望んでいたのかわからないが、宿で見るより多くの星を確認することが出来て満足してもらえた。すると男は突然、星はこうして見るものだと言ってゴロリとその場に寝転んでしまった。洋服が汚れることと地面をカサカサと這う灰色の平たい舟虫が頭をよぎったが、せっかく桟橋まで来たのだから！　と一緒に寝転んで星を見ることにした。もう少し二人の年齢が近ければドキドキしたかもしれないが、男は私を全くの子供扱いしていたので、ただ左右から聞こえる波の音に包まれながら、静かに星座や流れ星を教えあって過ごした。他に、どうしてこんなところに一人で来たのかと聞く私に、政治家の秘書は多忙を極める仕事で、なかなか取れない休みが取れたら一人で静かに星を見たくなるのだと教えてくれた。その時に男の名前も政治家の名前も聞いたが、残念なことに頭文字さえも記憶にない。彼は今でも永田町で多忙を極めているのだろうか。無防備な十七歳の私にまじめで誠実な態度で接してくれたことに感謝したい。

南風荘にしては大きな団体、どこか有名大学のゼミの先生と生徒たちのグループも面白かった。西表島の自然の中で今までに発見されたことのない「なにか」を探し、学校で薬や研究に役立つ新しい物質を探すのだと言っていた。大抵のものは発見しつくされているが、西表島にはまだまだ可能性があると意欲に燃えていた。普段自分が飲んでいる薬もこんな人たちが最初に見つけたのかと思うと妙にワクワクした。

ワクワクすると言えば一人で夕食の後片付けをしていた時のこと、犬の世話をしに庭へ出ていたお母さんが目をキラキラさせながら「早く早

く！」と私を玄関の前に引っ張って行った。そして植木鉢に一つだけ咲いている白くて大きな花を指差して「月下美人よ！」と興奮ぎみに教えてくれた。一晩しか花を咲かせない不思議な植物で、花を見ることが出来るのはものすごく運が良いことらしい。そんな花は聞いたこともなかったが、去年は知らない間に咲き終わっていたと言いながらうっとりと花を見つめるお母さんを見ていたら私も嬉しくなって、しばらく一緒に花を眺めていた。

お母さんには宿の裏にあるパイナップル畑にも連れて行ってもらった。お母さんは日陰を、日焼けしたい私は日なたを歩きながら初めて畑に向かう時、パイナップルはどんな風に実をつけていると思う？と聞かれた。スーパーで見るパイナップルは実の上に葉が付いているので、りんごやみかんと同じように木に生っているのかと答えた時のお母さんの嬉しそうな顔は忘れられない。畑に着くと一面に広がるパイナップル畑は膝下ほどの高さで、尖った葉に支えられるようにして実っている様は想像と全く違っていた。またこれが今まで食べたどのパイナップルよりも甘くて感動した。客のデザート用に台所で切り分けるお母さんの隣でお皿とフォークを用意しながら、子供時代はパイナップルの芯がおやつだったと話してくれた。しかし芯でさえ外国産の硬くて白っぽいものとは比べ物にならないほど黄色く甘く果汁があふれていた。

南国の果物では、お父さんが「シャカトウ」という緑色でソフトボールほどの大きさの果物を見せて自慢そうに説明してくれた。釈迦の頭に似ていることからついた名前だそうで、本当に釈迦の頭のように表面がボコボコとしていた。食べ頃のものはイチジクのように柔らかく手で半分に割れた。中はバナナを潰したように白くてねっとりした果肉に黒い種が並んでいた。お世辞にも美味しそうとは言えない見た目に最初の一口は勇気がいったが、アイスクリームのような味と食感と言うお父さんの言葉を確かめたくてエイッとスプーンを口に運んだ。すると本当にアイスクリームの味がするではないか！しかもこの不思議な果物は庭に生っているという。たちまち気に入り、熟したシャカトウを見つけては冷やしてデザートにしていた。

その他、パッションフルーツやグアバも初めてお父さんに食べさせてもらったが、どちらも小さい種がぎっしりと入っていて食感が悪く好きになれなかった。

こうして思い起こすと、十七歳の少女には危なっかしいこともあったが、優しいお父さんとお母さんや少し変わっているけど温かい客に可愛がってもらい沢山の素晴らしい経験をさせてもらった。

そんな楽しかった夏休みも終わりに近づき、帰りの飛行機のチケットを購入するため初めての休みをもらって石垣島へ向かった。来た時と同じ小さな船で渡った石垣島は、沖縄離島情報を握り締めてやって来た時から数十日しか経っていないのに、港に駐車された何台ものタクシーや近代的なホテルが目に入ると大都会のように感じられて胸が躍った。

まず旅行社に向かい給料とほぼ同額の飛行機のチケットを購入した。そして夕食の時間に合わせて帰りの船のチケットを購入し、船が来るまでの数時間を港周辺の土産店や商店街を見て過ごした。特に何を買うでもなく、西表島とは違うお洒落な店のディスプレイや品々、新しい雑誌を立ち読みするだけで十分楽しかった。

いよいよ京都に帰る日の朝は、寂しいから宿で見送ると言うお母さんと一階で記念写真を撮ってお別れをした。大好きだったお母さんとの別れはつらく、普段泣かない私も涙がこぼれたのを覚えている。そしてお父さんに港まで車で送ってもらってさよならをした。

一日かけて石垣島から那覇空港、那覇空港から伊丹空港と、西表島から離れるにつれて景色が都会になっていき、伊丹空港の上から見た大阪の夜景がものすごくきれいで新鮮に感じられたけれど、急にお母さんの笑顔が思い出されて寂しくなった。久しぶりに会える両親、友達、チャンネルが豊富にあるテレビ、仕事のない毎日……。楽しみにしていたはずのそれら全てよりも西表島での経験が頭の中に溢れていて、しばらくは京都での生活に馴染めなかった。

しかし、私の「沖縄の思い出」はこれで終わりではなく始まりに過ぎなかった。次の冬休みは新たな島へ行くこととなる。

（つづく）

街中の似顔絵師（十三）

滝本　文彦

浅草演芸ホールの前を歩く。
「落語や漫談を聞いて笑って帰りましょうか」
と妙子さん。
「昼の部は終わりに近いねえ。半端な時間だから、うなぎにビールはどうですか」
と僕。笑うより先ず酔っ払いたいのである。笑いながら酔っ払うのが健康に一番なのだが。
雷門通りを歩く。赤い大提灯の下にもどった。風袋を担いだ風神像、太鼓を背負った雷神像に睨まれ、幅３・３ｍ、高さ３・９ｍ、重さ７００㎏の大提灯に圧倒され重厚な門をくぐった。雷門仲通りを歩く。「うなぎ色川」に急ぐ。朝、築地で仕入れた、備長炭でふっくら焼ける、身の厚いうなぎの香りがもう漂ってくるようだ。一歩一歩足が速まる。もうすぐだ。
ジョッキの中の金色の生ビール。きめ細かな柔らかい真っ白な泡が蓋をしている金色の生ビールが目に浮かぶ。一歩一歩が駆け足となる。足の速い妙子さんがあきれる。
「ずいぶん早足ですね。よっぽど美味しい鰻なんですねえ」
「あったりめえよ。なんしろ色川の鰻ですからねえ」
言葉が江戸前になる。店の前まで来た。準備中の札がぶら下がっていた。がっくりきて前につんのめりそうになった。17時からだ。１時間待たねばならぬ。ちょいと考えた。
「もうちょっと先に行くと『駒方どぜう』という店があるんだ。酒で酔わせた泥鰌を丸丹味噌と筑摩味噌の合わせ味噌で煮て、カツオダシの別汁で仕立ててねえ、すぐ煮立つように薄めの鍋を火力の強い炭で煮るんです。行きましょう行きましょう」
「お酒を飲みたいんでしょう？　その泥鰌鍋で。会うたびに酒を飲んでますもの」
「……そうですねえ。酒が主か泥鰌鍋が主か。酒のために泥鰌がある。泥鰌のために酒がある。酒と泥鰌は酔うために存在するということなんですねえ」
「私はお酒が飲めませんからあなたの言っていることがよく分かりません」
と言って妙子さんは不機嫌になった。
『駒方どぜう』に入った。店内は広い座敷の間だ。テーブルの代わりに長い板を並べている。長い板に沿って、ぺちゃんこの黒と白の格子柄の座布団を並べている。妙子さんは風変わりなだだっ広い和風の間を見渡し和んだ表情になった。
「浅草らしい雰囲気ですねえ。くつろげて、気取っていなくって」
と僕は言いほっと一息。
「足のない板だけのテーブルの前に長く座っていると疲れるんじゃないですか」
と妙子さんは薄い板を前に言う。
「そうですねえ。腰に負担がかかるかなあ。背を丸めた前屈みの姿勢で宴会ですねえ」
しかしその心配は要らなかった。炭火の焜炉の上に泥鰌鍋をのせて運ばれてきた。箸で突くのに程よい高さである。香ばしい味噌の香りの中で泥鰌が踊っている。カツオダシが効いた割下と炭火で煮るアツアツの泥鰌鍋に二人は満足した。泥鰌鍋には日本酒かと思ったが日本酒は苦手で、中ジョッキの生ビールを注文した。妙子さんは、又お酔いになるんですねと言いたげである。
味わい深い泥鰌鍋で生ビールを一気に飲んでしまった。焼酎の炭酸割りを注文する。こんなに美味しい泥鰌鍋は初めてですと妙子さんは言う。泥鰌に元気をもらって酒も進みますと僕が言う。炭酸で割った焼酎は回りが速い。
「瀧本さんは音大を卒業なさったんですか？」
と不意打ちを喰らい、
「……ハイ」
焼酎をグイと飲む。
「どの音大を卒業なさったんですか？」
「ハイ、……武蔵野音大です」
「ピアノ科ですか？」。
「イイエ、作曲科です」
と言って酔ったうえにボウーとなり、焼酎をグイと飲み気持ちを落ち着ける。
「素敵ですねえ。作曲できるなんて。なん曲お作りになったんですか？」
「……中退しましたから……。納得のいく曲がなかなかできず途中で投げ出したり、完成させても人に聞かせるほどの曲でないと思って破りすてました」
「瀧本さんの曲を聞きたいですねえ。なぜ武蔵野音大を中退したのですか？」
答えを探し、また焼酎をキュウと飲む。
「授業料が高くって滞納しまして、アルバイトしなくてはと思い、キャバレーのバンドでピアノを弾き始めて、お金が入ったけど僕の人生転落しました……」
「どういうことなんでしょう。もう少し詳しく話していただけませんか？」
「詳しく話すとガッカリしますよ」
「そのガッカリする話を聞きたいで

すね」
気を持ち直すために焼酎をあおる。酔いが醒めて行くようだ。泥鰌鍋で元気をつけなきゃ。泥鰌を一匹飲み込んだ。焼酎で胃袋に流し込む。
「今日はお酒をのむピッチが早いですねえ。だいじょうぶですか？」
「この泥鰌鍋の味が格別ですから。うーん、薬味のネギをたっぷり添えて食べるといくらでも飲めそうです」
「武蔵野音大の作曲科に入られたのに、中退するなんて残念ですねえ。卒業して学校の先生になれば、生活も安定し社会的信用もできたのに……」
「学校の音楽の先生になろうと一度も思ったことありません。僕は声楽が苦手ですから。大勢の生徒の前で歌わなければならない職業はごめんですね。大きく口を開けて大声をはりあげて喉ちんこ見られるのは恥ずかしい」
妙子さんは怪訝そうにこちらを見る。武蔵野音大は大嘘で、小さな名も知られていない専門学校を中退したのだ。武蔵野音大の作曲科と言ってしまい、後は嘘に嘘を塗り、嘘が厚みを増し限りなく広がっていく。ばれないかと思い、苦しくなり、また焼酎の炭酸割りを喉に流し込んだ。
「今の不安定な生活をいつまで続けるおつもりですか？」
「……好んで今の生活を続けているわけではないんですが、いつの間にかこうなってしまって、なんとか普通の人並みの人生をと思っているのですが、こうなっちまって……」
泣きたくなった。うつむくばかりである。俺は無頼派だ！　ダダイストだ！　と言いたいけれど、現実的な女性のまえでは言葉が出てこぬ。妙子さんの学歴や環境にコンプレックスを感じ、無理をし、対抗意識が出て、つい武蔵野音大の作曲科と言ってしまい、いまさら引くに引けず嘘で押しとおすことにしたが、堂々と法螺を吹くにはそれ相当の覚悟と修行が必要かと思い弱気になる。今まで僕に真面目に優しく付き合ってくれた妙子さんを騙していると思うとやりきれない気持ちになった。「今はどうですか。作曲をしようと思っています？」
「時代の先端を行っている音楽、現代音楽といわれている曲を創れなければ作曲家とは言えないと思い、１５０年、２５０年も昔の作曲家の作品を模倣しても無意味だと思い、自分には現代音楽と言われている作品を作る才能もなく、教養もなく、模倣することも出来ないつまらん人間ですわ」
「時代の先端を行っている作曲家にどういう人がおります？」
「そうですねえ。ほんの少し入り口を覗いたにすぎませんが、……アルノルト・シェーンベルグやアントン・ヴェーベルンやシュトック・ハウゼンとかジョン・ケージという変なのも居ります」
「私の知らない作曲家ですが、有名な作曲家なんですか？」
「現代音楽と言われている音楽にお金と時間を使う人達なら知らない人はないでしょう。それくらい有名なんです」
「ジョン・ケージと言う作曲家はどういうふうに変なんですか？」
「プリペアード・ピアノという作曲法を発明しまして、ピアノの弦に洗濯挟みやヘアピンやガラス瓶や消しゴムや釘を挿んで弾くピアノ曲を作曲しましたね。変なピアノ曲と思いますが、もっと変なピアノ曲を創ったんです。『四分三十三秒』と言う曲です。ピアニストがステージに現れます。そしてピアノの蓋をそっと開けるんです。それから椅子に座りピアノの鍵盤に向かうが音を出さないんですね。ピアノを弾かず、四分三十三秒瞑想する。そしてステージの袖に消えるのです。世界の作曲家たちが驚き、注目し、話題になり、有名なピアノ曲になった。沈黙の音楽と呼ばれています。素晴らしい曲ですね。いいアイデアです。どう思います。この沈黙のピアノ曲」
「……冗談ですかそれ。入場料を取ったのですか？」
「どうかなあ。有名な曲なんですが、入場料の事は誰も言っていないなあ。このピアノ曲は冗談じゃなく大真面目なんです」
「……頭が変なんじゃないの」
「エエ、僕もそう思います」
どうやら妙子さんは僕の頭が変だと言っているようだ。それから話さなくなり、二人の間にしばらく沈黙が続いた。〈私をからかって！〉という怒りの表情も感じられた。武蔵野音大の作曲科というのもばれたようだ。なにか軽蔑の眼差しも感じる。
僕は嘘をつきとおすのに疲れ、しゃべりすぎて疲れ、アルコールが体を駆け巡る。頭がぐらぐら揺れ、とろんとした目で妙子さんを見たら、向こうを向いて僕を無視していた。酔っ払いとの付き合いに疲れたというふうに見えた。しかし『駒方どぜう』の泥鰌鍋は格別で、妙子さんの鍋も僕の鍋も一滴の汁もなくからっぽになっていた。
ぼちぼちお開きということで立ち上がったが、ふらふらぐらぐらして方向を定めるのに苦労する。妙子さんに嫌われるのではないかと思い、

なんでもないてばなんでもないに
ぽくりのおとさえみにしみる

と中原中也の詩を口ずさみ、しっかりしなきゃと歩き出す。妙子さんはどこにいるのだろうと思ってあたりを見たが、さっさと外へ出て行ったようだ。勘定を済ましてふらりと出たら、妙子さんは仏頂面して待っていた。そしてお互い無口になって浅草駅に向かった。

（つづく）

わたしの大学生活（５）

ふじみ　ちよ

合唱コンクールで金賞を受賞した。10月上旬に行われた関西大会でのこと。５月の大阪府合唱祭、７月のジョイントコンサートを乗り越えてはきたが、順位が付けられる大会への参加は、大学合唱団に入団してこれが最初。しかも関西地区という大きな場での思わぬ好結果に、素直に喜んでいる。

ここに至るまでにはやはり相当な練習量をこなしてきたと思う。思う、と記すのは今考えるとこれまで本当に楽しく練習できてきたと感じるから。細かく振り返ってみればそりゃ苦難はそれなりにあった。長時間立ちっぱなしで歌い続けて足がむくんだり、夜の練習で帰宅が遅くなって翌日に響いたり、うまくいったと思った箇所をダメ出しされて気分が萎えたり。でもまぁ苦難なんてそんなものだ。全体的に見れば練習は非常に楽しかった。楽しく努力を積み重ねることができて、更にこんな素敵な賞までいただいた。素晴らしい経験をさせてもらえて大満足。

コンクール前のことだが指揮者の先生がこのようなことを言っていた。入賞できなくても気にすることはない。それは審査員と音楽的な縁がないだけだ、と。それまでのコンクールに対するわたしの考えといえば、「参加することに意義がある！　なんてものじゃない。入賞できなきゃ意味がない」てな感じ。こんなわたしは指揮者の先生のその言葉に少し考えさせられた。確かにコンクールなんてものは、いろいろなバックグラウンドを持った人間が審査するわけで、そこには先入観や偏見、好みが多少なりとも存在する。だから入賞を逃す団は決して「ただ歌が下手」というわけではなく、その団の音楽的世界観、表現力が審査員の価値観に通じないということも理由になるのだと考えられる。じゃあ例え入賞してもそれはたまたま審査員の好みに合っただけであって、飛び上がって喜ぶほどのことじゃないな、と頭の片隅で思い始めたそのとき、指揮者の先生はこう付け足した。

「でももし入賞が決まったら、そのときは一瞬だけ思いっきり喜んでください。それが入賞できなかった団の皆さんへの敬意です。」

その言葉がすごく胸に響いて、みんなで抱き合って喜んでいる自分を想像したりした。

本番では珍しく緊張せず、自分がどう歌えたかもよく覚えている。「自分の声しか聴こえないホール」だと予め教えてもらっていたのでいつもよりも周りに耳を澄ませたこと、響きを常に前に持っていくことを心がけたこと、客席全体に目線を送ったこと。ミスは何ヶ所かはあったけれど本当に心を込めて歌うことができた。

コンクール前にもうひとつ指揮者の先生に聞かされていたことがある。それは今の大学名で歌えるのはこれが最後だということだ。わたしの通っている大学は10月になって正式に某大学と統合(吸収合併だとも言われているけれど……)された。コンクール出場登録時は統合前だったため、10月上旬に行われた本番ではまだ旧学名を使うことができたがそれができるのはこのコンクールが最後というわけだ。最後。それはとても特別なことだ。これが終わってしまえばもうわたしたちは本質こそ同じだが違うものになってしまう。わたしたちの大学がちゃんと存在していたということを、ひとつのメロディーにして聴く人の心に焼き付けたいと強く思っていた。その思いのおかげで今回わたしは丁寧に歌い上げることができたのだと思う。

さて、このお話のオチになるのだが、わたしが所属している団は実は優勝したのではない。ぶっちゃけた話大学部門のＡグループ(このコンクールはＡＢ方式をとっている)の中では7位だったのだ。ちなみにＡグループを構成しているのはたったの９団体。わたしたちの団は金賞を受賞した全７団体の最下位である。がっかりされましたか?(笑)　手にした盾は何よりも輝く金。金は金だけれどこの順位をどう受け止めるか。課題は山積み。現状から目をそらさずに、次はいよいよ最大のイベント、12月の定期演奏会に向けて前進。

お金の話

内田幸彦

専門書は別として文筆家でも余り金銭の事には触れていない。はしたないと思うのか、沽券に関わると思うのかは判らないが。

私は三十年余りも小商売で生きて来たから、お金に関する思いは他人様よりも多い。

損だ、得だ、儲かった、損したなどと、いろいろな経験を余儀なくされ、関心を持たざるを得なかった。所有欲でなく、お金の功罪についてだ。

落語に『饅頭が怖い』という話があるが、私はお金が怖い。お金の持つ便利さが人を魅了し常識を失わせたり、身を破滅させたりする。人を喜ばせも出来るが、怒らせる事も少なくない。お金に関しては余程の神経を使わねば、問題が起こり易い。だから、私はお金が怖いと言うのである。

良い方法ではないが、新しい人と交際が出来たら、私はお金をからませてみる。例えば、呑みに行ったとする。初めから割り勘と決めておれば別だが、いざ支払いとなると、今日は俺が払っとく、とサッと払う人もあれば、出すような事は言うが出さない人、始めから出すつもりもないのに呑みに行こうと誘う人、と正直に本性をさらけ出してしまう。勿論、本人は気付いてはいない。本を借りて忘れていてもそう問題にはしないが、お金はこうはいかない。お金の怖さはここにある。

もう十年以上も前だが、同級生が母校の寄付を集めに来た。

「一口五千円ですが……」

私はいくらしようかと考えていると、

「なんなら二千五百円でも結構ですが……」

と値下げした。小さな商売で苦しいと思ったのだ。私は頭に来た。家内に、

「オーイッ、五万円持って来いッ」

と持って来させ払った。集金の二人はペコペコ礼を言って帰った。それ以来、「内田、内田」と呼び捨てだったのに、「内田さん」とさん付けで言われるようになった。お金は使いようで諸刃の剣、毒にも薬にもなるから怖いと言うのだ。

「馬鹿ねえ、良い恰好して。月末までどうするの！」

と、女房殿に文句を言われた。

商売初めだった。信頼していた友に借金を頼んだ。いくら友でも借金を頼むのは言い辛くて、そのキッカケを見つけるのに苦労してやっと切り出すと、

「商売なんて止めとけ、それより仕事を探せ」と上手く逃げられた。以来、借金は本職の金貸しつまり銀行、信用金庫、闇金融に限ると二度と素人には頼まない事にした。素人に頼むと怖がり（返らないと）貸してくれないばかりか、陰にまわって、「あいつが金を借りに来た」と陰口の材料にされるだけだ。

借りる相手が本職の金融機関なら、逆にこちらはお客様、喜んで貸してくれる。また要求も出来るし、利子を値切る事も出来る。素人に借金は間違っても言うべきではない。得るのは恥ずかしい思いと後悔だけである。

借金も、生活費、遊びの金は絶対すべきではないが、建設的な借金、つまり家を建てるとか、仕事の資金とか、是非とも必要な資金を借りることは恐れるべきではない。借金の重さが努力とファイトになる。反って自己資金より成功率が高いと私は思っている。

人生を、お金を中心に考えて生活するか、人生に重点を置くかで、大いに違ってくる。お金を貯めるのは安心感が持てるだろうが、節約せねば貯まらないし、貯金も減らしたくない。となるとしたい事も出来なくなる。

一九七三年（昭和48年）、腸捻転で九死に一生を得た。ベッドでフト思った。助かったから良いようなもの、あのままもし死んでいたら、私の人生は何だった？　貧乏と苦労と努力の連続だった。このままでは余りにも自分が可哀相過ぎると、人生を大幅転換し旅をし、絵と文章を習い、海辺にも山辺にも家を買い、今も楽しんでいる。

来世は虫に生まれてくるか、牛なのか、花なのか。人間に生まれてくるとは限らない。人間に生まれてきた今が、今日が大切なのだ。僅かな金を残し、家族に紛争を残しても困るし、使っておいた方が無難。お金は貯めるものではなく使うものだと思っている。

混沌市凡日録　３０

ザ・モンスターズ

蒲原直樹

真夜中に近い時間に電話が鳴った。パジャマに着替えていた針賀妙子はあわてて受話器を取った。

「針賀先生ですか、三年二組の床島ですが、遅くにすみません」

教え子の母親だった。岡山の老父母になにかあったという知らせではなかったので、妙子は少しほっとした。

「どうしたんですか、早苗さんになにかあったとか」

「いいえ、そうじゃないんですが……」母親は少しだけためらった。

「パパに早苗の話をしたら、先生と話したいと言うんです」

そう言うか言わないかに電話をもぎとった様子で男の声が続いた。

「先生、どういうことだよ、うちの子がイジメられたのに学校はなんにもしなかったそうじゃないか、そんなことってあるか」

男は酔っているようだった。妙子は眉をひそめた。

「ですから、その話は関係者全員の前でするということに」

「なぐった男の子をなんで罰しないんだ、あんた、その子をひいきしてるんだろう、うちの子を馬鹿にしてるんだ、そうだろう?」

「……」

「なんで黙ってるんだ、これは傷害事件だぞ、おれは警察行ってもいいんだ、男の子の親を訴えてやる」

「そういう話ではないんです」

「じゃ、どういう話なんだ?」

妙子はちらっと時計を見た。明日の出勤は七時だ。そのためには六時に起きなくてはならない。こんな時間に怒鳴りあいをしているわけにはいかない。

「とにかく、親と子どもたちがお互いに事実関係をきちんと認識できるような話し合いをもちますので、ご意見はそこでお聞きします、今夜のところはここまでにしてください」

妙子はそう言うと「逃げるのか、卑怯者!」などという罵詈雑言を吐き出す電話を切った。たちまち呼び出し音が鳴り響いたが、彼女は無視してベッドに潜り込んだ。それでもベルは鳴り続けたので再び立って電話のモジュラージャックを引き抜いた。

翌日、針賀妙子は混沌市立第五小学校三年二組の教壇に立っていた。前日に教室を騒がせた床島早苗は無断欠席だった。しかしホームルームの途中に窓側の生徒が叫んだ。

「先生、早苗ちゃんが来るよ」

妙子が顔を上げて二階の窓の外を見ると、正門を通って校庭を横切ってくる床島親子の姿が見えた。両親の間に挟まれて手をつないだ早苗が楽しそうだった。彼らは三年の教室には向かわず、管理棟に入っていった。妙子はいやな予感がした。案の定、一時間目が終わる頃に校長が飛んできた。

「針賀先生、こまりますよ」校長は生徒たちが聞いているのにもかまわず、妙子をののしった。

「教室のトラブルはそちらできちんと解決してください。床島さんは早苗さんのことで学校を告訴すると言っているんですよ!」

「その件は前に説明したはずです、床島さんは一方的に早苗ちゃんの言うことだけを信じているんですよ」

「とにかく、校長室に来て床島さんに謝罪してください」

「そんな、校長先生……」

教師と保護者がもめた時に、管理職は間に立って教師を守るのが仕事のはずだ。しかし今はそんなまともな校長は少なくなった。この校長も上しか見ていないヒラメ管理職だった。妙子は唇をかんだ。

「みなさん、三十分自習してください」

彼女はそう告げて校長とともに管理棟へ向かった。校長室には見るからに堅気ではなさそうな男が待っていた。スーツは縦縞、ネクタイは銀、リーゼントの髪は金色に染まっていた。男は妙子を見ると歯をむいて怒

鳴った。

「おめえか、うちの娘の集団暴行を指揮したって教師は！……あやまれ、早苗にあやまれ！」

妙子はちょっとたじろいだが、次の瞬間に毅然として応えた。

「集団暴行なんてしてません。クラスで早苗ちゃんがつるしあげにあったことは認めますが、それは理由があってのことです。その前後の流れを保護者会で話し合うことになっていますから、そこできちんと説明するつもりです」

「なんだと……」

男は妙子の胸倉をつかまんばかりの勢いで詰め寄った。

「てめえ、自分の責任を棚に上げてうちの早苗を悪者にしようってのか、それでもてめえは教師か、生徒がかわいくねえのか！」

「そうよそうよ！」後ろで母親もわめいた。

「校長先生、こんなダメ教師、今すぐ首にしてくださいよ、うちの親戚には教育委員も市会議員もいますから大丈夫です、さっさと放り出して！」

「まあまあ、まあ……」

校長はそこでやっと口を出した。

「ご両親のお腹立ちはわかりますが、ここは私に免じてひとつ穏便に……針賀先生にはあとから反省文と謝罪文を書かせます。それをお届けしますので、今日のところはこれでご勘弁を……」

妙子は校長の言い草にむかっ腹が立ったが、それでこのモンスター・ペアレンツが帰るなら、としぶしぶ頭を下げた。早苗はその間ずっとそばの椅子に座って知らん顔をしていた。床島親子は教師に頭を下げさせたことで満足したのか、意気揚々と凱旋した。

数日後、保護者会が開かれた。三年二組の教室には三十名の生徒とその両親、もしくは父母のどちらか、総勢七十名が集まった。彼らは自分たちが先週起こった一大事件になんらかの関わりがあると知っているので、教室は異様な緊張に包まれていた。床島親子は教室の真ん中にいて、父親は威嚇するように周囲をにらんでいた。時間になって針賀妙子は教壇に上がった。

「みなさん、緊急の保護者会にご参加ありがとうございます。お忙しいところに集まっていただきましたのは、この教室で深刻なトラブルがあったからです。それにつきまして、子どもたち自身の口から説明させます」

彼女はそう言って一人の男子生徒を指名した。生徒はしぶしぶという感じで立ち上がった。

「最初はボクと前田君がふざけてモップでチャンバラごっこしてたんです。それが星野さんに当たって、星野さんは前田君をつきとばして、前田君が床島さんに体当たりしたんです。床島さんは前田君とボクにむかって『デキソコナイのクズ』と言ってツバを吐きました。それでボクらが『デキソコナイはおまえだ、ヤクザの娘、ヤクザの娘』とはやしました。そしたら……」

「そこから前田君、どうなったか教えて」

「ハイ、早苗ちゃんは、カッターを振り回しました。『死ね、おまえら』とか『殺してやる』と言いました。それで、みんなで早苗ちゃんを取り囲んで大槻君が後ろからカッターを取り上げました」

「じゃあ、大槻君、それからあとの事を話して」

「……なん人かが、早苗ちゃんの頭をたたきました。前田君はシャツの袖を切られたので早苗ちゃんの髪の毛をひっぱりました。そして『反省しろ』と言いました」

「そうしたら？」

「早苗ちゃんは『だれが反省なんかするか、おまえらみんなパパに殺してもらうから』と言いました」

そこで、床島早苗が大きな声で叫んだ。

「ウソだよ！……『あたしにこんなことしたらパパに殺されるから』って言ったのよ！」

「あたし、聞いたよ」

「ボクも」

早苗の言葉を否定する声があちこちから上がった。教室の全員が冷たい目で少女とその家族を見た。床島父親は、

「ケッ、まったくどいつもこいつも……」とつぶやいて教室を見回した。

「バカバカしい、帰りましょ！」

そう言って床島母が立ち上がり、一家は凱旋するように教室から出て行った。

教育紙芝居のほんわかたのしい世界（5）

蒲原雅人

■タイトル「じゅんちゃんすとっぷ」
■作者・八木田宣子 絵・和歌山静子
■制作・発行　童心社

■ロシア民話『てぶくろ』のアイディアを応用したもの。だんだん乗客が増えていく。客の正体は小出しにされ、そのたびに客の名前を子どもたちに当てさせる仕掛け。単純だがまだ1年生くらいだとすなおに紙芝居世界にはいってきてくれる。

■絵は力強い線描が効いている。キャラクターもかわいい。太鼓や笛を用意して演じてみるのもいいかもしれない。

■タイトル「しろいからす」
■作者　たのしいイソップ
脚本・上地ちづ子
絵・福田庄助
■制作・発行　童心社

■とぼけた味わいはなにより絵の力による。画家は作品世界をよく理解したうえで造型にかかっているのがわかる。シンプルだが独特の線が生きている。文章はところどころスピーディさを欠くので、大意を残して今風にあらためた。

■それにしても時代を超える絵というものがあるものだ。福田庄助氏の絵本はいずれも枯れた味わいでこころに残る。この紙芝居には氏のそんな持ち味が充分に発揮されていると思う。